3才児保育についての研究

研究第5部　植 松 治 子
愛育幼稚園　渡 辺 亮 子・神 郡 敏 子

I 目　　的

我々の身ぢかなところで、3才児保育を希望してくる者が毎年増加していることは事実である。しかし、一般に、これを統計的にみると、全国3才児の約4％で、その数からいえば、まだまだ少ないが、幼稚園における、3才児保育への関心と意欲は，高まつてきていると言われている。即ち、

昭和39年度　44,600人
昭和40年度　46,488人
昭和41年度　48,140人

と年を追つて、その数は、毎年約2,000人位ずつは増加しているとのことである。

もともと、教育基本法のなかには、満3才より、就学までの幼児を教育することが示されているのであるが、実際に行われている保育は、現在までは、どちらかと言えば、5才児中心であつた。それが、近年、しだいに4才児の教育へと拡大し、ごく最近では、2年保育が一般的傾向の方向を示している。つまり、このことは、保育所は別として、やがて近い将来、幼稚園が3才、4才、5才と、幼児時代の教育が3年間教育になる方向を示しているのではないだろうか。

しかしながら、3才児の集団教育に対しては、一般的にはその教育の効果に疑問や懐疑を抱く者も少なくない。教育の意義もはつきりとは認められていないのが事実である。

我々の幼稚園では、昭和29年より、3才児の教育を始めてから、はや10年になる。その教育の内容や方法を次に述べるが、我々の3才児の教育方法は、その心身の発達に則した保育を考えてきた。従つて、保育日も幼児によつては、週1回2時間の教育であるが、週3回の2時間の保育の幼児の組もある。このためには家庭の協力が必要である。その為、母親も子どもとともに、週1回登園して、幼児教育の専門の知識を受講し、幼児のしつけの実践を実習してもらうことにした。保育の内容は、幼児の健康、社会、言語に関するものを中心に、これを幼児の遊びの中に包含して、行なうやり方である。幼児の人数は1組20名前後を保ち、教師は、1組に2名を配置した。初めのうちは、毎週登園する幼児の遊びの状態を充分に観察し、個々の指導を、重点的に考えて行つたので、保育計画の作成は、保育の終つたあとで、次のプランを立てるという、いわゆる日案を主体として行つてきたが、このように週を単位として指導計画を立てることの弊害も現われてきた。

そこで我々は、月の指導計画を立てる事にした。そして、これは現在に至つている。この月の指導計画をたてるために、基礎資料として、幼児のさまざまな生活の記録をし、調査研究を行つた。

その基礎資料の一部分をここに集録して掲載する訳である。

3才児の集団教育は、一般的に難しいとされてきたがその理由の1つに、3才児は、その心身の発達上、ようやく嬰児的なわくを脱して、ひとり立ちの生活を始めようとする時期、その心身の発達も著しく言語を自由に使うようになり、行動もしだいに社会化されていこうとしている段階にあるのであるが、この発達段階においては個人差が著しい。また未発達の部分も残つているので、集団生活の中に於いても個人指導をする場合が多い。

したがつて、個人の特質をよくとらえながら、その時の状態に最も適した指導が大切である。

この場合、教師が目標や計画を立てて、その規定の中で保育するよりも、自由な子どもの欲求を満たしながらしてやれる自由保育がより適切な保育であるのではないだろうか。但し、自由保育とは放任や無計画の保育ではない。幼児の中に教師が入り込んで指導をすることが大切である。

なお、すべてが自由保育ではなく、園の生活の中には集団で一斉に画一に行うことが、より効果的なものもある。

以上のようなことを根底として指導計画を作成してみたわけである。

Ⅱ 方　　法

3才児の教育効果をたかめるには、どのように指導すればよいか、3才児の指導計画はいかにあるべきかを、課題として考察することにした。そこで、3才児の特性に鑑み、以下のようなことに留意点をおくことにした。

すなわち、○3才児の特殊性を知る（身体発育、運動機能、知的発達、社会性、生活習慣など）　○幼児の家庭環境を知る（入園調書、家庭調査表など）　○入園前の幼児の実態調査をする。　○入園後1カ年間の成長発達の過程を考えてみる（従来の3才児保育の実態より）○幼稚園の環境をととのえる（組編成、教師の配置、教材選択、その他）　○指導計画を立ててその方法を考える（年間の指導計画、月、週、1日）とそれぞれの指導計画を立てることを考えなければならない。

我々はこの中で、1日の指導計画がそれぞれの指導計画の要となり、これの積み重ねが年間の指導計画となることを考えて、1日の指導計画を重視した。

前に述べたように、我々の3才児保育のやり方は、1日、あるいは3日保育である。その中で充分の効果をあげるような保育内容を配列しなければならない。このためには、3才児の経験や活動の実態をよく観察し、これをまとめたものが次の指導計画の基礎資料として必要である。そこで、てはじめとして次のような保育内容を定めた。すなわち、幼児の発達の段階から見て、先ず、健康、社会、言語、といつた面の経験や活動を重点的に取り上げ、幼児の遊びや活動の中でこれを行なう。ここに述べようとする内容は、特に3才児の保育で重要なものであり、しかも日々繰りかえし行なわなければならないものである。

1　健康の面からは、先ず園生活の中で行なわなければならない項目として、(1)手を洗う、(2)鼻をふく、(3)お弁当をこぼさないで食べる、(4)ボールを投げる。

2　社会の面からは、身のまわりの始末をするといつたことから、(1)自分の道具類（クレヨン、のり、はさみなど）の後かたづけをする。(2)くつのしまつをする。(3)スモツクの着脱ができる。(4)合図によつて集まる。(5)製作を最後までやり遂げる。(6)友だちと仲よく遊ぶ。(7)共同の遊具の後かたづけをする。

3　言語の面からは、(1)あいさつをする（おはよう、さよなら、いただきますなど）(2)先生の話を聞く（童話を聞くなども含む）(3)かみしばい、絵本を喜こんで見る(4)大勢の前で表現できる。

4　音楽リズムの面から、(1)皆んなの前で歌う、(2)拍子打ちができる（$\frac{4}{4}$拍子）(3)曲に合せて歩くなど合計18項目を幼児の日々の経験や活動の中から選び項目別に、それぞれの発達の状態を観察記録してまとめた。

観察記録の期間は昭和39年度及び40年度の2カ年としなおこの対象児は週3日保育の3才児102名である（男児44名、女児58名）。幼児の家庭環境状況は第1表に示してある。記録の様式は紙面の都合で省略するが179頁以下のⅢ結果の各図の項目について6回記録した。

第1表　幼児の家庭環境調査（昭和39、40年度・2カ年間）
Table 1.　Home Environment of Children (1965, '66)

(1) 職業別 Occupation	会社員 Company Employe	会社役員 Company official	医師 Doctor	商業 Commerce	自由業 Free	教員 Teacher	その他 Others	計 Total
	32%	33%	4%	10%	6%	10%	5%	100%

(2) 両親の学歴 Education of Parents		大学院 Graduate	大学 Under graduate	短大 Short-term Univ.	高校 Upper Secondary	中学 Lower Secondary	計 Total
	父親 Father	9%	77%	0	14%	0	100%
	母親 Mother	0.4%	34%	19.6%	46%	0	100%

(3) 両親の年令別 Age of Parents		20代 Twenties	30代 Thirties	40代 Forties	50代 Fifties	計 Total
	父親 Father	5%	81%	14%	0	100%
	母親 Mothrr	37.7%	61%	1.3%	0	100%

(4) 兄弟関係 Sibling	長子 First	中間子 Middle	末子 Last	一人子 Only	計 Total
	22%	4%	32%	42%	100%

観察の手続きについて簡単に説明を加えて見よう。それは幼児１クラス20名前後を２人の教師が保育する訳であるが、５クラスの幼児の集団について、１カ月１回の予定で観察記録を始めたが、入園当初、夏休みその他の休園があるので、１学期（５、６、７月）の３回と２学期（10、12月）の２回、３学期は２月に１回、全学期を通じて５回の観察の記録の集計である。項目の内容についてはそれぞれの項目について幼児の経験や活動の全体を見ることは困難であるので、それぞれの観察記録をする場面を設定した。例えば、○手を洗うという１例についても、いくつかの場面があるが、これらを全部記入することは困難であるし、その必要もないと思われる。そこで“手を洗う”の場面は便所に行つた時、食事の前、いろいろの遊びが終り次の遊びに移る時などの場をとらえ記録した。以下これの説明を第１図から順をおつて説明する。

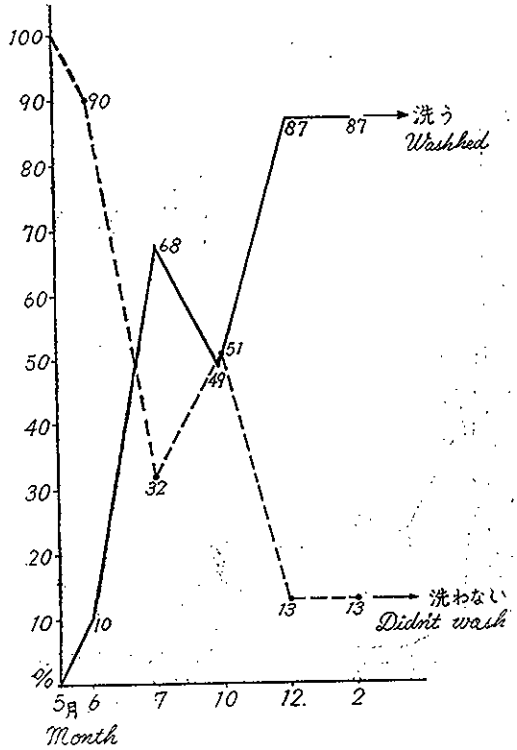
Ⅲ 結　　果

○ 手を洗う（第１図）

個人的に“手を洗いましよう”と声をかけた場合には全員が洗えるので、これを更に習慣化するために手を洗うという呼びかけでなく「おべんとうにしましよう」との呼びかけに対しての反応をみた結果が図のようになつた。

６月は、子供達にとつては、集団生活の経験も浅く、集団への呼びかけも自分のこととして受け取ることが出来ない。また手を洗うということと、“おべんとうにしよう”ということの関係がわからなかつた子どもが相当多かつたが、７月には呼びかけだけで68％が手を洗うようになつた。10月に48％と下つたのは長い夏休みのあとということや、わかつていてもしないという子どもができてきたのが原因と思われる。12月から２月までは87％と上昇している。この結果から継続的に行われる行動が次第に習慣化されてゆく過程を知ることができよう。

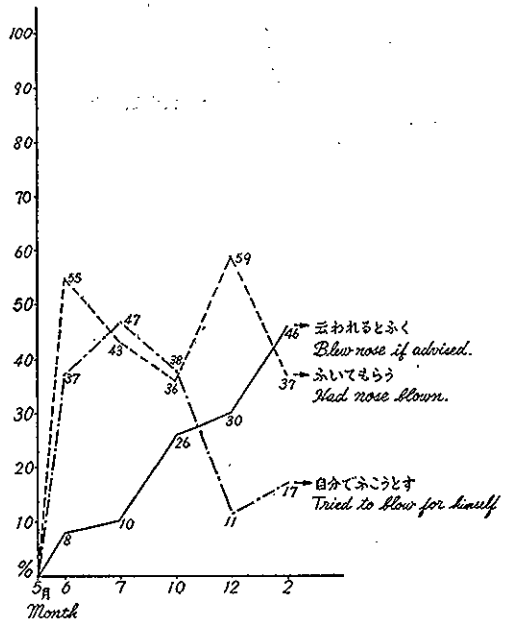
第１図 手 を 洗 う
Fig. 1. Wash Hands



○ 鼻を拭く（第２図）

これは全員に対しての調査ではなく、たまたま風邪を引いて鼻を出している子供が、自分で拭くかどうかという観点から調査した。したがつて対象の子供と人数がその月により変わり、この図により発達の過程を比較することは出来ないと思うがいわれると拭ける子供は多くな

第２図 鼻 を ふ く
Fig. 2. Blow Nose

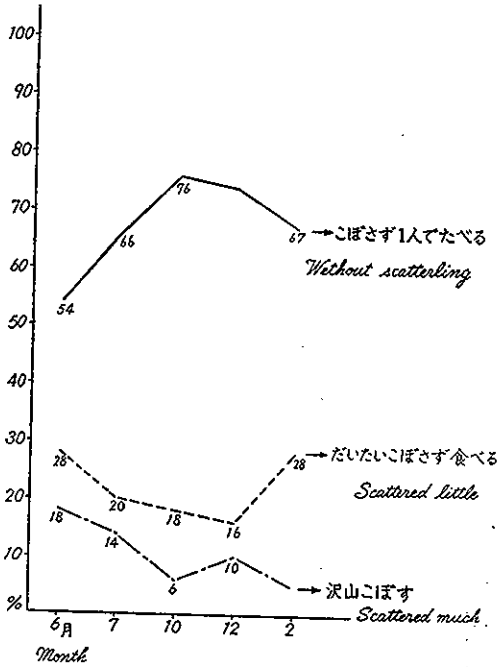


つている。

○　おべんとうをこぼさないで食べる（第3図）

パン、御飯などこぼすか、こぼさないかという角度からの過程をみようとしたが、これは観察する日のおべんとうの内容が大変影響する様に思えた。例えば3学期にこぼす子供の多いのは、ストーブで暖めてもらいたいとパンからごはんにきりかえた子供が多くなつたこと、また食事時のおしやべり等が影響しているのではないかと思うそれ故、この第3図により、一年を通じての発展の過程を正確に見ることは出来なかつた。

第3図　お弁当をこぼさないで食べる
Fig. 3.　Have Lunch without scattering Food



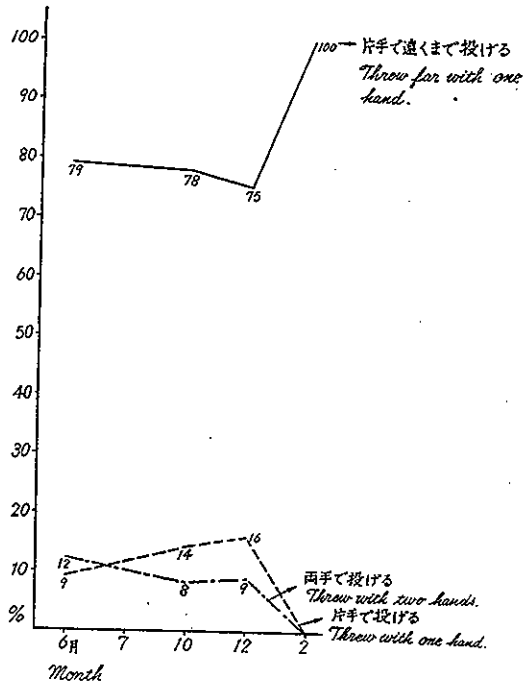
○　ボールを投げる（第4図）

幼児の運動的なあそびのひとつとしてゴムボール（直径10cm）を片手で投げてみることを観察した。これによつて、運動的な遊びの内容や場所的な問題をも考えられるので実施したが、1米以上投げる位の線で投げていたが多少の変動はみられたが、一般的に上昇線をたどり12月以降は全員2、3米位は投げられるようになつた。初めから79%が出来、2月には100%になり充分出来るようになつた。

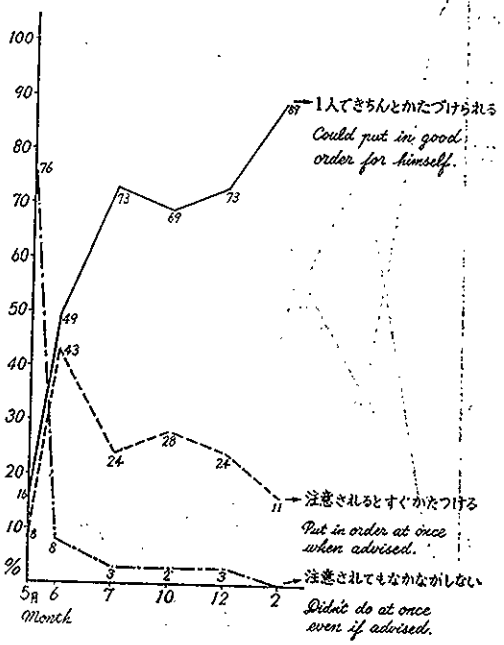
○　クレヨン、のり、鋏の後始末をする（第5図）

大体月ごとに順調な発達を示し、2月には89%の子供がいわれないでも自分から片づけられようになつた。

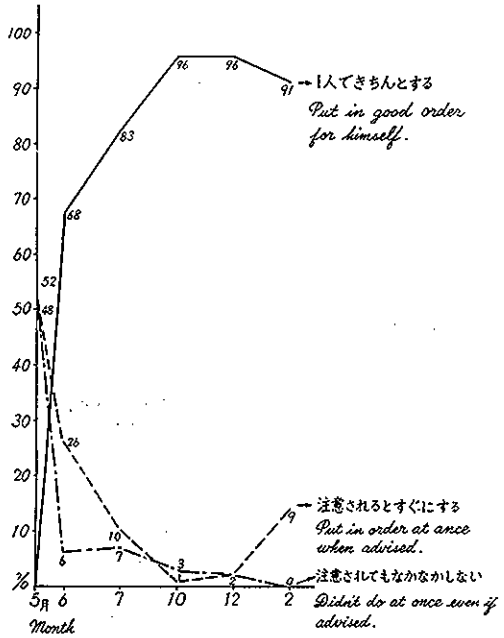
第4図　ボールを投げる
Fig. 4.　Throw a Ball



第5図　クレヨン、のり、はさみのあとしまつをする
Fig. 5.　Put Crayon, Paste, Scissors in order after using them



第6図　くつをしまつする
Fig. 6. Put Shoes in Order



○　くつを始末する（第6図）

図のように始めから過半数の子供が出来ていたが特別の子供をのぞくほか2学期には96%の子供が出来るようになつた。

○　スモツクの着脱（第7図、A、B）

衣類の着脱を自分でさせるために園にきたらスモツクを着用させることにした。スモツクのスタイルは自由、前明きボタン1.5cm以上のものとし袖の長さは自由とした。6月に21%だつたのが7、9月と上昇し、10月には72%の子供が出来るようになつた。12月下つているのは長袖にきがえたためと思われる。ぬぐ方は図のように着る方のように袖の長さの影響はなかつた。

○　合図によつて集まる（第8図）

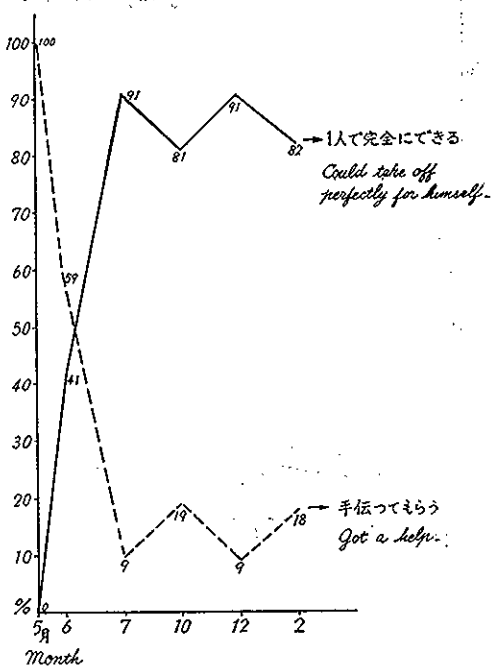
集まりの合図で5分以内で集まれるかどうかということを調べた。これも次第に上昇し2月には100%出来るようになつた。

○　製作物を最後まで仕上げる（第9図）

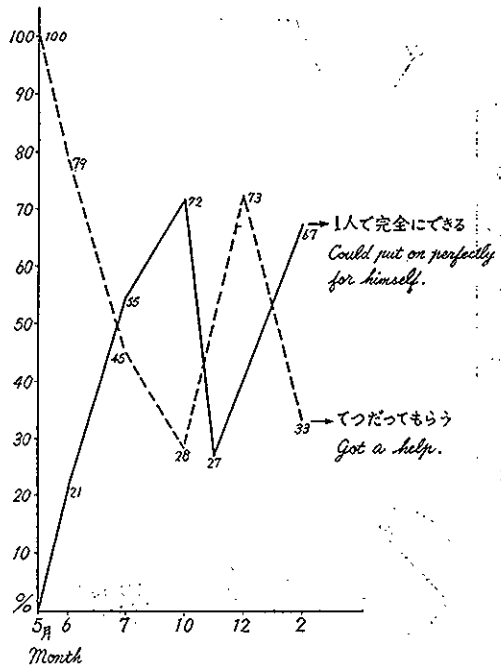
出来上つた結果の上手、下手ではなく最後までやりとおすという意志の面から観察した。6月には依存的な子供もみられたが12月からは、ほとんどの子供に作り上げようとの意志が見られた。7月に下つたのは製作物が6月に比べて、3才児には少々無理な教材ではなかつたかを反省している。

第7図　スモックの着脱
Fig. 7. Put on and take off Own Smock

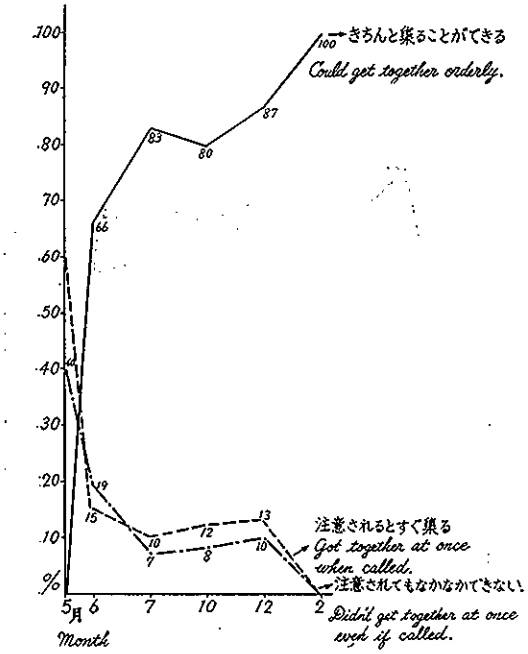
A. スモックを脱ぐ
A. Take off own Smock



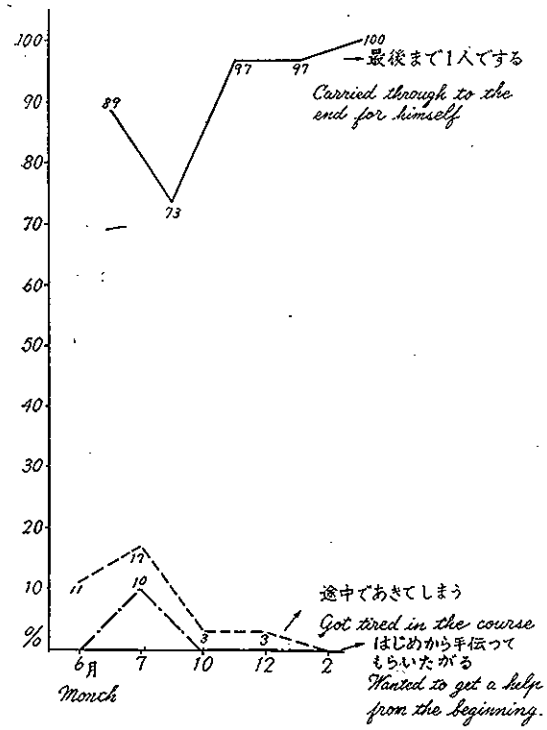
B. スモックを着る
B. Put on own Smock



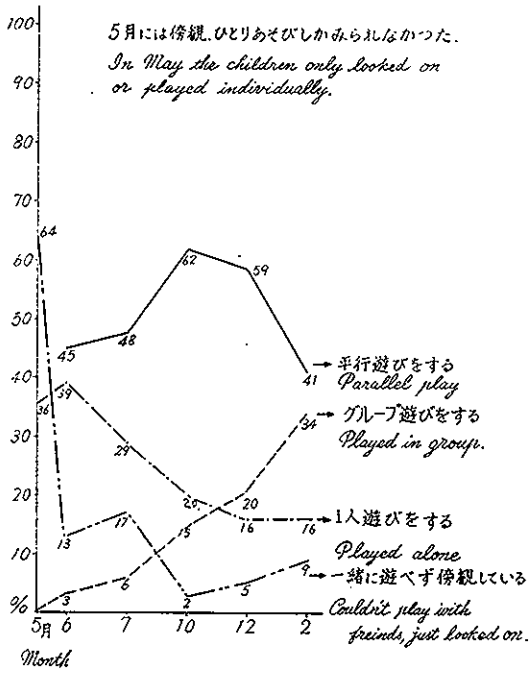
第8図　合図によって集まる
Fig. 8. Get together at the Signal-bell



第9図　製作物を最後まで仕上げる
Fig. 9. Carry though making Things to the End



第10図　なかよく遊ぶ
Fig. 10. Chum up with Friends



○　仲良くあそぶ（第10図）

遊ぶ人数は少いが6月より次第にグループ遊びが多くなつている。並行あそびは10月をさかいとしてだんだん減つているが全体的にみると大きな割合を示している。このことからみて、まだこの年令の子供は並行あそびが遊びの大半を占め、少しづつグループあそびへと移行する段階であることが分つた。

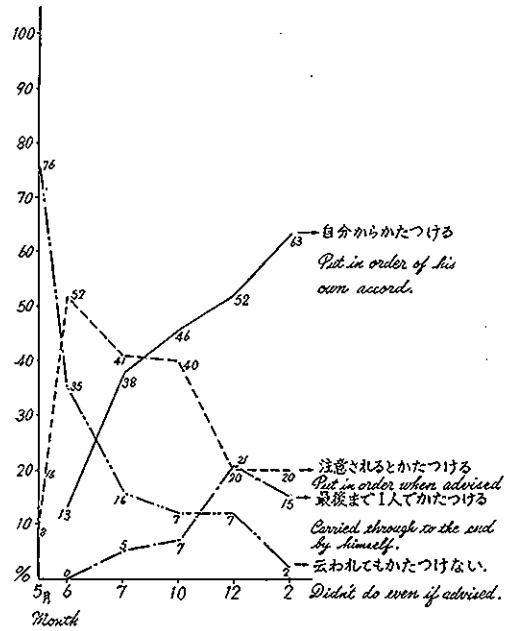
○　共同の遊具をあとかたづけする（第11図）

共同で使つた遊具を片づけおわるまで片づけようとする子供は月を追つて序々にふえているが3才児組では、特定の子に限られていた。最後まで片づけることは出来なくとも自分から片づけようとする積極的な態度をしめす子供は6月で13%、次第に上昇して2月で63%になつている。この結果から、この年令の子供では自分から徹底的に片づけることは無理であつても、片づけようとする自発的な意志は充分しめされるものであるということがわかつた。したがつて幼いからといつて何時までも養護するばかりでなく、物の始末などのような、基本的な習慣の躾は、基礎づけられるものであり、又基礎づけられねばならないものだという事がいえる。

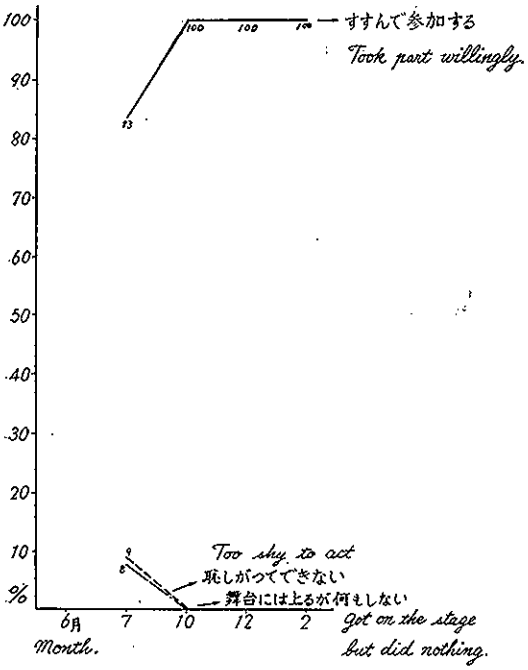
○　大勢の人の前で行動できる（第12図）

第1回のこれは他の3才児組との合同の場面をみた。例えば子供会など7月を除き以後全員の大集団の中でも参加し得るようになつている。

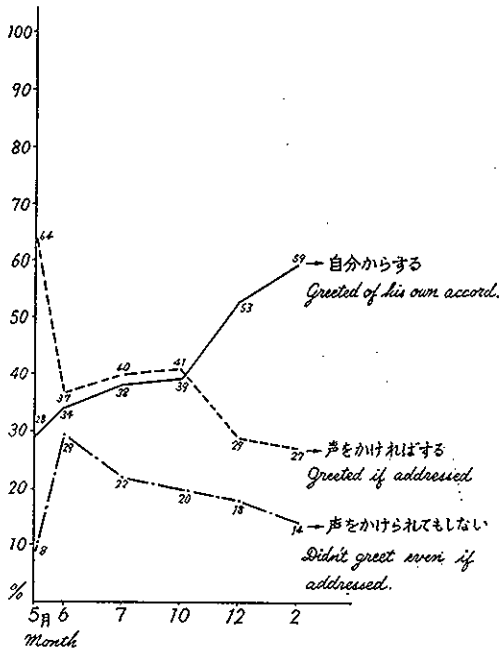
第11図 共同の用具、遊具のあとかたずけ
Fig. 11. Put Common Tools and playthings in order



第12図 大勢の人の前で行動できる
Fig. 12. Can act in the Presence of Many People



第13図 あいさつをする
Fig. 13. Greeting



○ 朝のあいさつ（第13図）

次第に上昇して2月には59%を示し、10月ごろからの上昇が目立つているのは幼稚園生活が楽しくなつてきたことと関連が深い。すなわち喜んで登園するようになつた。これは共同あそびの上昇線と平行している点からも推察される。

○ 童話をきく（第14表）

これは6月から約半数の子供が聞いているが、興味を持つて聞いていたかどうか。10月ごろからは、話したあとの質問に対して反応をしめす子供もぐつと増し、この頃からは内容を少しづつ理解し興味や関心を深めて聞くようになつた。

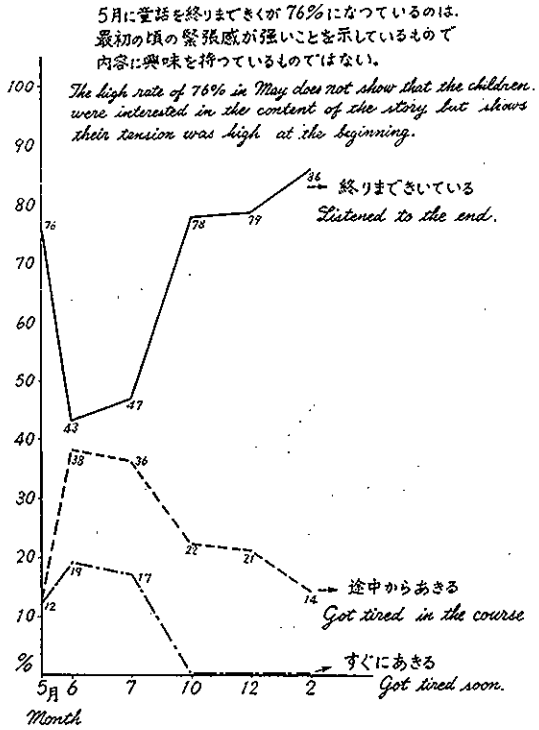
○ 紙芝居を見る（第15図）

童話に比べると最初からよく見ていて子供が興味を示した。

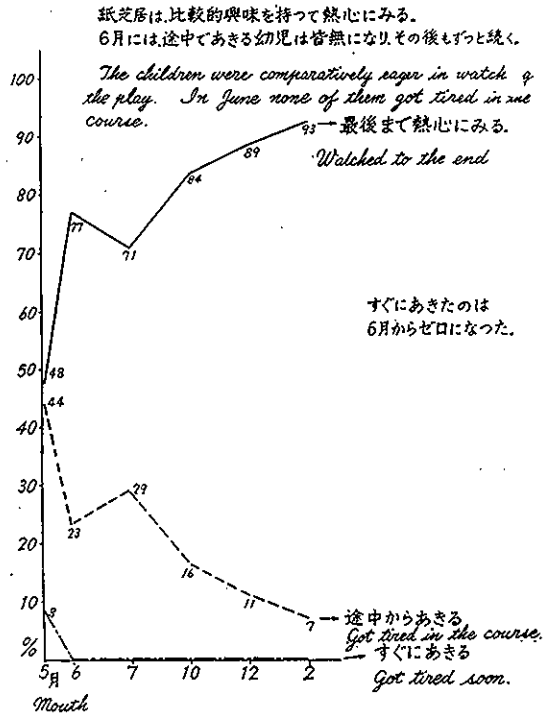
○ みんなの前で1人で歌う（第16図）

2学期が山で冬休みをすぎた後、反つて低下している これは歌えないのではなく、この頃には自意識が強く表われたと同時に集団の中でも自分の意志を通すことが出来るようになつたこと、またその時に気分が乗らないと、理由をつけて歌いたがらない子供も、でてきたためではないかと思う。

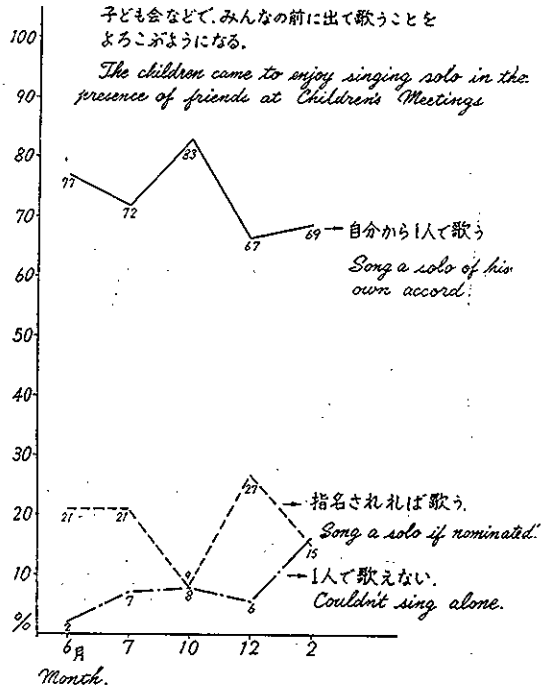
第14図　童話をきく
Fig. 14. Listen to Stories



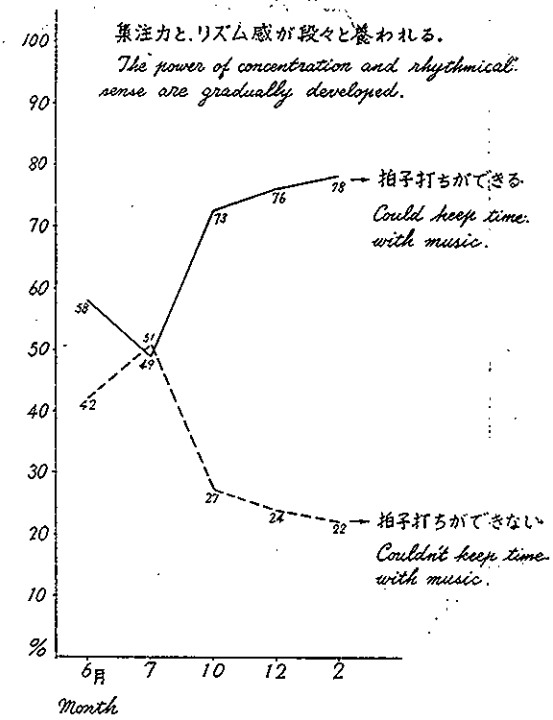
第15図　紙芝居を見る
Fig. 15. Watch "Picture Play"



第16図　みんなの前で1人で歌う
Fig. 16. Sing a Solo in the Presence of Friends



第17図　正しい拍子打ちが出来る
Fig. 17. Can keep Time with Music



○正しい拍子打ちができる（第17図）

その時の雰囲気や個人の気分で違うが大体4拍子の拍子打ちは半数位の子供が出来るようである。7月に下つているのは暑気の強さのために集中力が低くなっているのではないかと思われる。

以上の結果から考えられたことは、個人的に行うものの習慣化は、先ず条件反射的に行い、日々の繰返しを行うことにより習慣づけられることがわかつた。

Ⅳ 考察及び結論

この研究の結果からは、次のことが考えられるのではないかと思う。すなわち、個人的に行う身のまわりの始末や、基本的な生活習慣は、入園後3ヵ月ぐらい（1学期）で身につけられる。例えば、“手を洗う”とか、自分が使つた用具や遊び道具の出し入れ、またはこれのあとしまつなど。しかし集団で行うもの、共同的に行うもの、例えば皆んなで使つた遊具道具のあとしまつ、合図により集つたり、グループ遊びなどについては、2学期（10、11、12月）8ヵ月から10ヵ月位を経て、ようやく身について行うようになる。すなわち、社会的な行動も個人的なものは、日々くり返し行うことによつて、比較的早く身についていくが、社会生活的な行動については時間がかかることが実証されたわけである。

以上のことから3才児の社会的意識が充分に発達しない時期に、教師が一方的にあまり画一的な保育をしても効果はあがらないということがいえよう。

また指導計画を作るため基礎資料として、役立てたいと思うのであるが、ここに記載しない重要なことが保育実践の場には多くあることを見逃してはならない。

たとえば、幼児の欲求不満と行動に関係する問題の中から、両親の生活態度と幼児との関係、幼児に与える影響やその扱い方、親子の結びつきの変化によつて一時的現象として変る幼児の生活態度などである。それらの扱い方や両親との連絡、その方法、幼児の性格的な問題は相当の時間を要する。また心理専門の指導者に相談しなければならないもので、容易に教師が独断で判断を下すことの弊害を識らなければならない問題も出てきた。例えば、表面的な行動だけをみて、知能的に知恵おくれなどといつた烙印をおすことの危険もある。また、集団生活に親しみにくい幼児の中には、1人つ子、同年令と遊ぶ機会がない、～遊び方を知らない、～過保護といつたことを考慮に入れなければならない。これらの問題は特に我々の幼稚園の特色ともいえるであろう。

以上のような問題を多く持つた幼稚園の幼稚児集団の場では、教師の配置の点から、特に教師の受持つ組人数を配慮しなければならない。そして指導の方法も入園当初は教師が仲だちとなり、親の協力が必要である。日常の生活の中では、特に幼児の個性によつて座席の配置、小グループの編成、幼児の抵抗感への配慮、幼児の遊具の種類選択や数の問題も特別の配慮が必要である。

基本的な習慣の自立、集団生活への適応、生活経験の拡大、創造性の芽生えなどといつた点に指導の焦点を合わせながら、方法はあくまで素朴な形で遊びの中に行われるように工夫をしなければならないということがある。以上教育内容だけでも未解決の問題が多く、今回の研究により問題の所在がはつきり解つただけで、3才児の保育はまだまだこれからの大きな研究課題であると思われる。

Study on Nursery Care of Children of Three-Year-Olds

Haruko Uematsu, Ryōko Watanabe, and Toshiko Kangoori

1. Purpose

Recently many people have come to be much interested in nursery care of children of three years old and are showing the will to take care of them, but their nursery care has not yet been generally realized in the kindergarten. The problem of the three-year-olds in the kindergarten will become a more important subject hereafter viewing from the fact that the period of childhood education is being extended from one year (of five-year-olds) to two years (of four and five), and then to three years. As it is not long since group care of the three-year-olds was started, only a few data have been available for study.

We have taken care of a group of three-year-olds in a way quite different from the care of the four and five-year-olds considering both the mental and physical development of the three-year-olds. We attempted to take care of the three-year-olds for two hours once a week or three times a week. We also asked the cooperation of their mothers establishing the lecture course for mothers. Both children and mothers were given guidance separately in the same kindergarten.

2. Care Method

Taking 18 items (some of them are mentioned below) into consideration, we cared the three-year-olds for two years (1964～65, 1965～66), observed their activities and studied on their guidance plan and method. 1) Health: wash hands, blow nose, take lunch without scattering food, throw ball. 2) Social phase: look after himself (or herself), put personal things and own tools in order, can put on and take off own smock, can get together hearing the signal-bell, carry through making things to the end, chum up with friends, put common playthings in order. 3) Speech: say such greetings as "good morning", "good by", listen to a teacher, listen to a story, be amused with 'picture stories' and picture books, make a short speech before a group of friends. 4) Others: music and rhythm.

3. Result

The findings show that the three-year-olds can manage to look after themselves and form basic daily life habits in three months (during the first term) after they were enrolled in the kindergarten (for example, wash hands, take out and put back own personal tools and playthings). But they can't put the playthings and tools they used in common or in group in order, can't get together at the signal-bell, can't play in group until 8 or 10 months pass(until the second term is over). It is proved that they acquire the personal habits earlier than they can acquire the art of social life activities. Therefore, it will make little effect if the nursery teachers try to guide and care the three-year-olds in one-sided and uniform way when the social consciousness of the three-year-olds has not yet been fully developed.